

夏に飲みたい！ ラムネびんについて知ろう！

冷えたラムネやサイダーは、まさに夏の風物詩！ラムネやサイダーのびんを手にとれば、それぞれに夏祭りなど、楽しい思い出がよみがえって来そうです。そんな情緒たっぷりな知識がたくさん！ちょっとだけ紐解いた炭酸飲料が日本に初めて伝わったのが浦賀に来航した（1853年）といわ艦隊を率いて浦賀に来航した時、に「炭酸レモネード」を艦に積んでい幕府の役人にこれを振舞い、ポンと音と泡が勢い良く出て役人は「新型の銃器か!」と思わず刀の柄にという逸話があるそうです。炭酸飲料は当時、コルクで栓をした「キュウリびん」に入っていました。

ぶりなラムネびんには、歴史やてみようと思います。
は、米国からペリー提督られています。
飲料水の一つたそうです。
栓を開けた時、びっくり！
手を掛け



ラムネびん以前に使われていた「キュウリびん」

「キュウリびん」は1800年代、炭酸飲料に使用されていたびんで、栓にはコルクが使われていました。栓から炭酸が抜けないよう、コルクを常に湿らせておく必要があり、びんが常にヨコになるように底が丸くなっていました。またコルクが炭酸の圧力で抜けないよう、びんと針金でグルグルと巻いて固定していました。

【東洋製罐グループホールディングス(株)：容器文化ミュージアム所蔵】

ラムネびんの発明者



ラムネびん（コッズボトル：Codd-neck bottle）は、1872年に発明したハイラム＝コッド氏（1838-1887英）の名前が由来となっています。飲み終わった後も、洗びんしてリユース出来ることから、当時としても画期的なびんでした。

今では貴重になった、オーラルガラスで作られた、ラムネびん。



ラムネとサイダーの違いは？



ラムネという名称の由来は、英語の「レモネード」が変化したことが始まりでした。サイダーはフランス語の「シードル：リンゴ酒」が英語読みになったものと考えられているそうです。

サイダーのびんには王冠栓が使われ、ラムネにはビー玉栓が使われていました。その後、びん以外の容器と栓の種類が多様化し、多くの商品が誕生しました。サイダーとラムネの違いは次第に曖昧になり、現在は「容器にビー玉が入っている」、「ラムネびん形状の容器に詰められている」炭酸飲料がラムネ、それ以外がサイダーというのが、一般的といえます。

昔のラムネびんの作り方



現在は樹脂製のキャップに

1990年頃に、樹脂製のキャップが登場し、今まで取り出せなかったビー玉が取り出せるようになりました。（取り出しの際は、ご注意を。）



※上の写真は、東洋ガラス 汎用びん「TGラムネ200ネジ」。
※出典：全国清涼飲料協同組合連合会「what'sラムネ?」他。